

レッドデータブックとは

レッドデータブックとは、絶滅のおそれのある野生動植物をリストアップし、その現状をとりまとめた本のことです。
 栃木県では、2005年に初版を発刊し、今回は、13年ぶりの改訂となります。
 栃木県版レッドデータブックは、これらの現状を多くの方にお知らせし、
 保全の必要性について考えるきっかけにさせていただくなど、
 人と自然が共生していくための指標となるものです。

2018 レッドデータブックとちぎ

■定価：本体5,000円+税 ISBN 978-4-88748-355-2
 ■A4判・992頁(オールカラー)・並製

I 概説

1 とちぎの自然

①地形・地質の概要 ②気候 ③生物相

2 レッドデータブック作成の背景・目的

3 レッドデータブック改訂の概要

①改訂の経過 ②改訂結果 ③検討体制 ④カテゴリーの定義 ⑤選定種一覧(カテゴリー順)



II 栃木県の地名等を冠する動植物の紹介

III 選定種等の解説

1 動物・植物・菌類

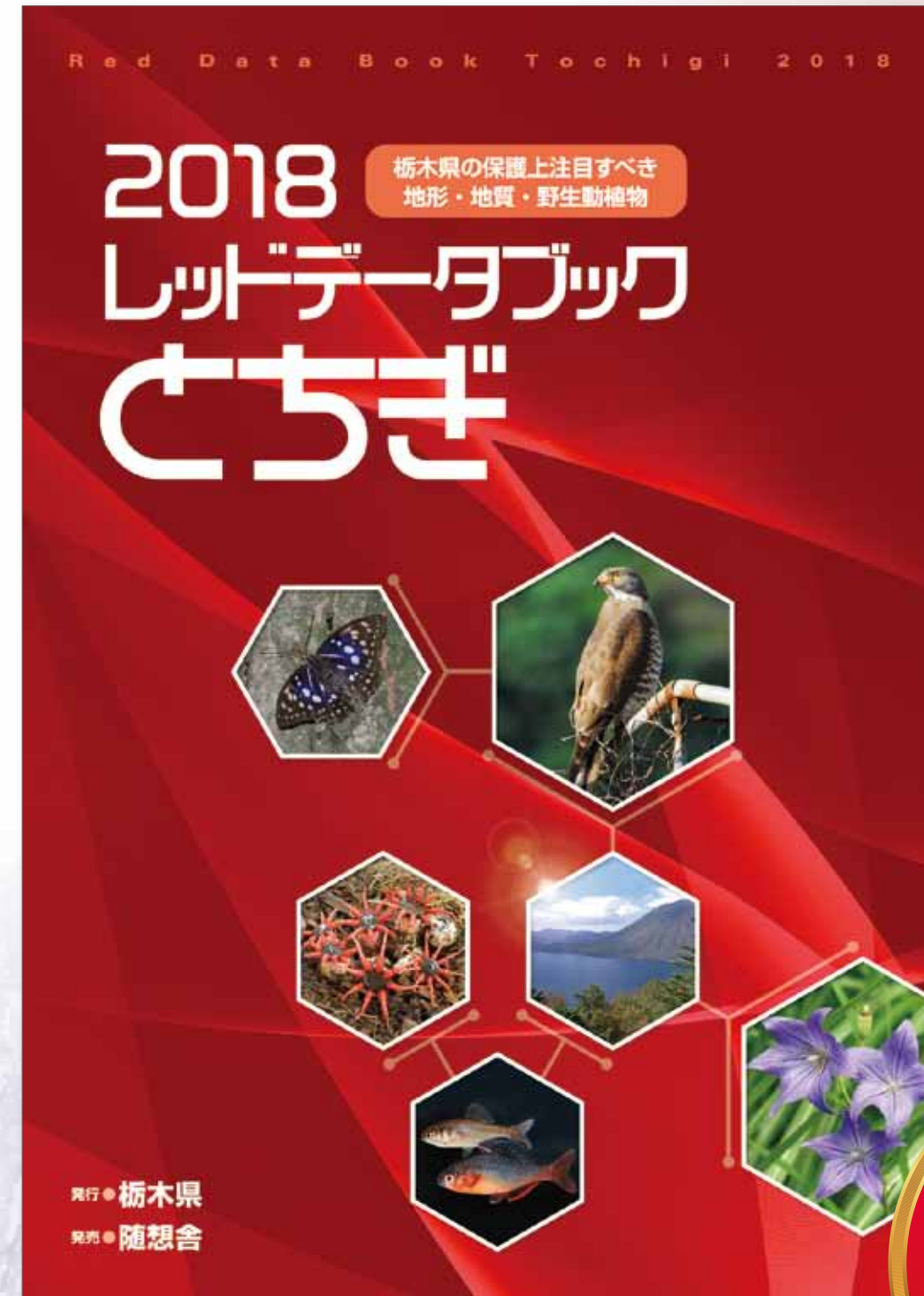
①維管束植物(シダ植物・種子植物) ②蘚苔類 ③藻類 ④地衣類 ⑤菌類 ⑥変形菌類
 ⑦哺乳類 ⑧鳥類 ⑨爬虫類 ⑩両生類 ⑪魚類 ⑫甲殻類 ⑬貝類(陸産貝類/淡水産貝類)
 ⑭昆虫 ⑮土壌動物

2 植物群落

3 地形・地質

2018 レッドデータブック とちぎ

栃木県の保護上注目すべき
地形・地質・野生動植物



13年ぶりに改訂!!

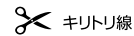
栃木県版レッドデータブック

動物等1536種、うち絶滅危惧種(絶滅危惧Ⅰ類およびⅡ類、準絶滅危惧)1025種を掲載予定。
 植物群落、地形・地質も再評価した。デザインもより見やすく刷新。

平成30年
3月下旬発行
発売中

お申し込み書

お申し込み日 年 月 日



『2018 レッドデータブックとちぎ』を		冊申し込みます。	
フリガナ			
お名前			
〒			
ご住所			
TEL(日中ご連絡が可能な番号をご記入ください)			
ご連絡先	ご担当者名		

取次店 株式会社栃木県教科書供給所
 〒320-0055 栃木県宇都宮市下戸祭2-12-8
 TEL 028-621-5525 FAX 028-625-3962

お取り扱い店

定価=5,400円
 [本体5,000円+税]
 A4判、並製、992ページ

発行 ● 栃木県
 発売 ● 随想舎

カラー写真でその特徴が一目でわかる



ルリイトンボ

Enallagma circulatum

トンボ目 イトトンボ科

栃木県：絶滅

環境省：—

【選定理由】ごく限られた環境に生息していたが、県内ではすでに絶滅したと考えられる。

【形態と生態】 体長は、雄25～32mm、雌24～30mm。後翅長は、雄19～24mm、雌21～25mm。翅は成熟すると斑紋が美しい瑠璃色になる。雌は緑色と瑠璃色の2型ある。

成虫は6～8月まで見られる。晴れて気温が上がると、水面上を活発に飛び交う。雄は水辺で縄張りをつくり、雌が侵入すると連結し、植物上に静止して交尾する。その後、雌は連結または単独で水面下の植物組織内に産卵する。潜水して産卵することもある。

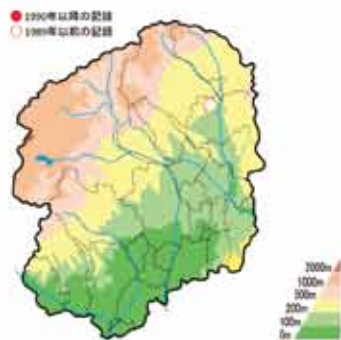
【生息環境】 周囲を森林に囲まれた山地の池沼。

【分布状況】 県内では、1951年に那須町（田中、1969）の記録があるが、これは後に誤りとして修正された（薄葉、1999）。また、1968年に大田原市（加藤、1968）の記録があるが、その後50年間確認されていない。国内では、北海道と本州（岐阜県と福井県の県境地域以北）に分布しているが、本州では局地的。本県との県境に近い福島県下郷町では現在も生息している。国外では、朝鮮半島とロシアに分布する。

【生息地の現状】 生息地の環境は当時と比べて大きく変更されたため、生存は見込めない。

【生存への脅威】 護岸工事による産卵場所の消失、オオクチバスなどの外来生物による捕食、水質の悪化。

（多和田潤治）



絶滅危惧種を目で判別できるよう
ランク別に色分け

誌面見本

テーマカラーを作成
カテゴリー毎に

県内の分布状況を
地形図に表示



ベッコウトンボ

Libellula angelina

トンボ目 トンボ科

栃木県：絶滅

環境省：絶滅危惧ⅠA類

【選定理由】 栃木県ではすでに絶滅したと考えられている。

【形態と生態】 体長は雄で21～31mm、雌で24～28mm。後翅長は雄雌ほぼ同じで30～34mm。和名は未成熟個体の体色と翅にある斑紋がベッコウ色であることに由来しているが、成熟すると翅から黒褐色の地色に変化し、翅の斑紋は黒色になる。ヨツボシトンボに似るが、本種は一回り小さく、翅端にある斑紋で区別できる。

出現期は4月中旬より6月下旬で短い。幼虫は平地の池沼、ヨシやマコモが生育する水路、大きな河川の古水田間を流れる小川などに生息する。未成熟個体の飛翔能力は低い。本種は高く飛ばず、1～2mの高さまでしか飛べない。

【生息環境】 発生は特定の池沼などに局限される。

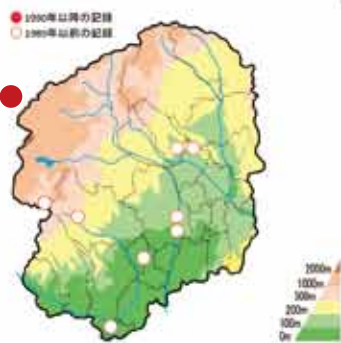
【分布状況】 県内では1950～60年代までは大田原市（旧石橋町）、小山市などの平野部で少ないが、1957年には宇都宮市の鬼怒川の堤防で数百個体が観察されている。その後、1970年代に入り、絶滅したと考えられている。国内では東北地方南部以南の本州、四国、九州に、中国北～中部、朝鮮半島に分布している。

【生息地の現状】 絶滅した場所の環境は変化していない。

【生存への脅威】 不明。

【その他】 埼玉県（絶滅）、茨城県（絶滅種）、群馬県（絶滅種）の保存法によって、国内希少野生動物種に指定されている。（高橋 浩）

選定理由、分布状況などを詳述



クロシジミ

Niphanda fusca fusca

チョウ目 シジミチョウ科

栃木県：絶滅危惧Ⅰ類（Aランク）

環境省：絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】 生息環境が限られ、近年の確認記録が極めて少ない。環境省のレッドリストで絶滅危惧ⅠB類とされる。

【形態と生態】 前翅長は19～22mm。大型のシジミチョウで雄雌の翅の形と色彩の差は著しい。雄の翅表面には暗紫色の光沢があり、前翅先端は尖るが、雌では光沢のない暗褐色で、翅の外縁は丸みを帯びる。

成虫は年に1回発生し、6月上旬から8月下旬まで見られる。若齢幼虫はアブラムシと共生し、これらの排泄した甘露を餌とする。2齢幼虫の後期からクロオオアリにより巣に運ばれ、アリから給餌を受ける。

【生息環境】 落葉広葉樹林、河川敷、草原。クヌギが優占する伐後5～10年の明るい萌芽再生雑木林の林縁、林内の枯死木などによって生じた日光の入る明るい場所を好む。

【分布状況】 栃木県では、1975年頃までは平地から山地にかけて広く分布していたが、その後個体数を減少させ、1995年の那須町の確認を最後に記録が途絶えていた。その後、2010年に市貝町で再確認され、以降は県南東部で少数が記録されている。

【生息地の現状】 生息地では開発により樹林が消失したり、管理放棄により荒廃したりして生息環境が悪化している。

【生存への脅威】 開発や管理放棄による生息環境の消失、悪化。

【その他】 生息記録のあるほとんどの都府県でレッドリストに掲載されている。絶滅した県も少なくない。（田中清貴）



シルビアシジミ

Zizina emelina emelina

チョウ目 シジミチョウ科

栃木県：絶滅危惧Ⅰ類（Aランク）

環境省：絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】 生息地、個体数ともに減少が著しい。環境省のレッドリストで絶滅危惧ⅠB類に指定されている。

【形態と生態】 前翅長は10～16mm。本種はヤマトシジミと良く似るが、後翅裏面の第6室基部の黒点が第7室の黒点の真下に位置するので区別できる。成虫は年4回発生し、第1化は4月下旬頃から始まり、6月以降はほぼ連続して9月まで見られる。ミヤコグサ、ヤハズソウ等の花で吸蜜する。県内で確認された幼虫の食草はミヤコグサで、飼育下では300～400卵を産卵することが確認された。

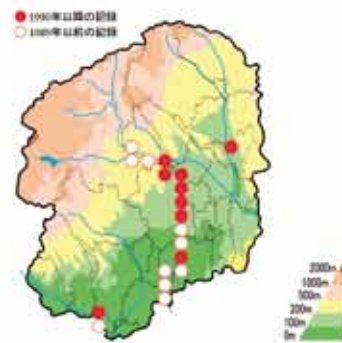
【生息環境】 ミヤコグサが生育する河川敷や堤防などの草地。

【分布状況】 県内では塩谷町から小山市までの鬼怒川、那須川間、足利市の渡良瀬川、渡良瀬遊水地に生息していたが、現在の分布は非常に局地的である。国内では関東地方以西の本州、四国、九州、琉球諸島、対馬などに、国外では朝鮮半島に分布する。

【生息地の現状】 堤防の草刈りや草丈の高い外来植物の繁茂により、ミヤコグサが減少傾向にある。また、河川の増水による環境変化により減少している。

【生存への脅威】 改修に伴う工事によるミヤコグサの消滅、シナダレスズメガヤなどの繁茂による環境悪化、昆虫愛好家による乱獲等が本種の生存を脅かす。

【その他】 さくら市では市の天然記念物に指定されている。宇都宮市では現存している生息地の大部分が自然環境保全地域に指定されており、採集が禁止されている。



可読性の高いフォントを用いた